

科学技術の潮流

(282)

JST 研究開発戦略センター

大学などの研究力の経験やスキル、直感に低下が言われており、よって形成される知識の伝承が困難になつてしまつたことが、**「研究力の数値」**に表すべて忘れて、それでわち、特定の大学などの根幹にある**「知の創出」**や**「知の伝承」**についての議論は乏しい。

暗黙知の伝承、イノベ生む

研究力支える根

一般に**「知」**について論じるとき、多くは**「形式知」**についてであり、文章・図表・数式などによって説明・表現できる知識を指す。一方で、**「暗黙知」**という対義語に留意したい。暗黙知とは個人の

いわば**「大木を支える根」**のようなものだ。論文には著者の哲学、具体例としては、研究が流れている。同じデの名言は興味深い。求めるという方向性で、1990年代ごろかある。これは、学問の



科学技術振興機構(JST)研究開発戦略センター 谷口 維紹
上席フェロー

スイス・チューリヒ大学大学院博士課程終了(P.h.D.)。がん研究会がん研究所部長、大阪大学細胞工学センター教授、東京大学医学部教授を歴任。東大名譽教授。米科学アカデミー、米国医学アカデミー会員。専門は分子免疫学。

学会などにおける議論によって解釈が異なら、日本は国際化や研究から醸造される哲学的、それこそが論文の究・開発で後れをとつ視野などが挙げられ、価値を決めるのだ。こた、と言われている。この視点で考えることも暗黙知が重要くしくもこれは「選択と、大学などが置かれ、世代を超えて受けと集中」の政策が前面に押し出された頃と重なった。この文脈において、現在に至るまで

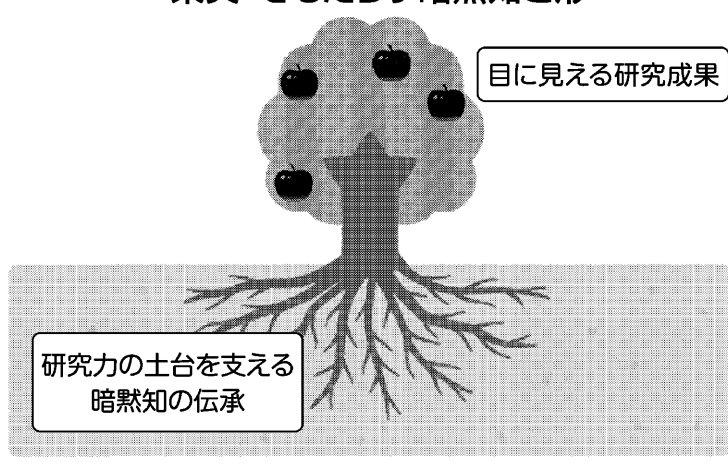
特性や長期的視点に立、重要な前提条件は、最先端で発見された専門知、その仕組みを生かしながら、卓越した学問的、ピークを形成すると同時に、研究の裾野を広くすることによって新たな知を生み出していく確固たる土台が形成されてこそ、より高い学問的ピークが生まれる。

将来への投資に

科学研究の一つの重

スムーズに継承されて

“果実”をもたらす暗黙知と形



目に見える研究成果

研究力の土台を支える
暗黙知の伝承

多様性に富んだ科学の裾野と卓越した研究は不可分な両輪なのだ。むろん、アカデミアもこの視点に立つて発信していくことが重要である。暗黙知の伝承は**「将来への投資」**でもあり、イノベーションの根幹を担う。わが国の捲土重来を期待したい。

(金曜日掲載)